

龍の危難とその説話的展開

— 「元聖大王」 および 「真聖女大王・居陀知」 条を中心に —

曹 述 燮

A Twist on the Solving of Dragons' Problem
in Ancient Korean Tales :

Focusing on [King Weonseong] and
[Queen Jinseong /Geotaji] Stories

JO Sulseob

1、はじめに

張徳順教授は、韓国の諸説話で抽出できる龍の性格を、1、至尊者としての性格、2、水を支配する者としての性格、3、予示者としての性格、4、人間的な性格の四点に取りまとめている¹⁾。この論文では、『三国遺事』の中で龍に関連する多くの記事より、水を支配するものとしての龍の姿を考察してみると同時に、その龍が説話の構成上どのように表出されているかを、「元聖大王」（『三国遺事』巻二「紀異」）および「真聖女大王・居陀知」（『三国遺事』巻二「紀異」）条を中心に浮き彫りにする。

2、龍の住処

A、水の支配者としての龍の住処

1) 井戸、泉、池

まず、本論構成の主対象となる説話「元聖大王」（『三国遺事』巻二「紀異」）および「真聖女大王・居陀知」（『三国遺事』巻二「紀異」）条を取りあげ、そこに描写される龍の面目を示しておこう。

2-9、・・・元聖王の即位十一年乙亥（795）、唐使が首都にきて一ヶ月留まってから帰っていた。一日後、二人の女が内庭に入ってきて、「私どもは東池と青池〔青池はすなわち東泉寺の泉である。『寺記』に、この泉は東海の龍が往来し法文を聞くところだとある。寺は真平王が建てたもので、五百の菩薩と五重塔および田民と一緒に献納した〕の二龍の妻であります。唐使が河西国の人二人を連れてきて、我らの夫である二龍と芬皇寺の井戸にいる龍などの三龍に呪文をかけ、小さい魚に変身させ筒の中に入れて帰りました。陛下は命令を下して、我らの夫である護国の龍をここに留まるようにしてくださいませ」と申しあげる。王は河陽館まで追っかけていきみずから宴会を開き、河西人に命令して、「おまえたちはどうして我らの三龍を捕まえてここに持ってきたのか。もし事実をありのまま白状しなければ極刑に処するであろう」といった。そこ

で(河西人は)三匹の魚をさし出してささげた。三カ所に放してやると、おのおの水の中で一丈あまりも跳びはねながら喜んで去っていった。唐人は王の明晰さに感服した。・・・「元聖大王」(『三国遺事』巻二「紀異」)

2-15、・・・真聖女大王(新羅第五十一代王:887~898)の時、阿嬪の良貝は王の末っ子であったが、唐への使臣として行くことになった。後百済の海賊が津島というところで通行を邪魔していることを聞き、弓士五十人を選んで連れて行った。船が鵠島に着いた時、海が大いにしけて十日あまりもそこに留まらなければならなかった。公が心配して人に占わせると、「島に神池がありそれを祭ればよろしい」という。そこで池に供物を供え、池の水が一丈以上も湧きあがった。その夜、良貝公の夢に老人がいて、「弓が上手な人を一人この島に留めておけば順風が得られよう」といった。公は目が覚め、このことで左右に諮問し、「誰を留めればいいのか」と聞いた。衆人は、「木簡五十片にわたしたちの名前を書き、水に沈ませ籤にすればよいでしょう」という。公はそれに従った。軍士に居陀知というものがいたが、彼の名が水中に沈んだ。そこでその人を島に留めると、すぐ順風が起り船は滞ることなく進んだ。

居陀知が愁いにつつまれて一人島に立っていると、突然一人の老人が池の中から出てきて、「わたしは西海の神である。ところが、いつもの一人の坊主が朝日が昇る時に天から降りてき、陀羅尼を唱えながらこの池を三周する。そうするとわが夫婦と子供はみな水の上に浮かび、坊主はわが子供たちの肝臓を取りだし食いつくす。いまは我々夫婦と娘一人が残っているのみである。明日の朝も(その坊主は)必ずやって来るはずだから、どうかあなたがそれを射殺してください」という。居陀知が、「矢を射るのはわたしの特技であるからいわれるとおりにいたしましょう」というと、老人は感謝して水の中へ見えなくなった。居陀知が隠れて待っていたら、翌日東から日が昇るとその坊主が果たして現れ、以前のように呪文を唱えて老龍の肝を取りだそうとする。その時、居陀知が矢を射あてると、坊主はたちまち老狐と化し地面に落ちて死んだ。そこで老人が出てきて感謝し、「公のおかげでわが命が全うできる。どうかわが娘で妻にさせましょう」という。居陀知は、「くださるからには断らず、まことにありがたくちょうだいいたします」といい、老人がその娘を一枝の花に変え懐の中に入れてくれた。また二体の龍に命じて居陀知を抱えて使臣の船に追いつかせ、またその船を護衛して唐につかせた。唐人は新羅の船を二体の龍が抱えていたのを見て、そのことをつづさに皇帝に陳述した。皇帝は、「新羅の使者はきっと並みのものではないだろう」といい、宴を張り、群臣たちの上席に座らせてたくさん金帛を与えた。

本国に戻ってきてから、居陀が花の枝を取りだすと女となり、そこで一緒に生活した。「真聖女大王・居陀知」(『三国遺事』巻二「紀異」)

以上が、「元聖大王」(『三国遺事』巻二「紀異」)および「真聖女大王・居陀知」(『三国遺事』巻二「紀異」)条の龍に関連する部分を取りあげたものである。これら両条で先ず指摘しておきたいことは、「元聖大王」(『三国遺事』巻二「紀異」)条における芬皇寺の井戸、青池(東泉寺の泉)および東池、さらに、「真聖女大王・居陀知」(『三国遺事』巻二「紀異」)条における西海上の鵠島にある神池と呼ばれる池、そのいずれの水域においても龍が棲息しているとすする点、それに、芬皇寺の井戸、青池(東泉寺の泉)および東池にそれぞれ棲息する

龍らは、そのいずれもが国を守護する役目を担う「護国の龍」⁴²とする点である。ところで、芬皇寺の井戸、青池（東泉寺の泉）および東池をはじめ西海上の鵠島にある神池にいたるまで、そのいずれの水域においても龍が棲息しているとする認識は、龍を水を支配するものとして捉える場合、その住处も水界で求めたことは自然にうなずけるところであろう。しかし、この龍らが国を守護する役目を担う「護国の龍」とする認識は何によるもので、いつの時代から始まったものであろう。この観念はやはり、仏教世界における龍の位置づけが、仏教の教えやその教えを信じ行おうとする人々を種々の障害から守護することを使命とする護教的性格⁴³に置かれていることに基づくもので、それがいよいよ「護国の龍」として拡大発展して信仰されるに至った点、そして、新羅の仏教が早い時期から永遠なる王権と護国を祈願する護国信仰として発展していた点と関連して形成されたものだといえよう。そして、同『三国遺事』の「文虎王法敏」（『三国遺事』卷二「紀異」）条においては、遺言によって東海の中の大きい岩の中に葬られた文武王が、普段から智義法師に、「わたしは死んだら護国の大龍となって仏法を崇奉し国を守護したい。」といていたとあり、「万波息笛」（『三国遺事』卷二「紀異」）条においても、神文王が、「東海に浮かんだ小さな山が感恩寺の方へ向かってくるようで波間に行ったり来たりしている」事象を占わせたところ、日官の金春質が、「亡くなられた父・文武王が今は海龍となって三韓を鎮護し、それに金庾信は三十三天の一子として今回下界に降りてきて大臣になっていたのです。云々」と解説したとある記事からすれば、少なくとも文武王（新羅第三十代王：661～681）の時代からは「龍の護国」的性格が強く認められていたということができよう。

2) 海と龍宮および龍城国

a) 海の龍と龍宮

2-5、聖徳王（新羅第三十三代王：702～734）の時、純貞公が江陵太守〔今の溟州〕に任ぜられて赴任する。・・・順調に二日ほどの道程を行くと今度も海辺にあずまやがあった。そこで昼食を食べていると、突然海の龍が出てきて夫人をさらって海の中に入ってしまった。公は動転しながら足を踏みならすがこれという妙案も浮かばない。するとまたもや一人の老人が、「昔の人の言葉に、大勢の人の言葉は鉄でも溶かすほど威力があるといっていますから、海中の生物だって大勢の人の言葉をおそれないはずがありません。この地方の者たちを呼びあつめ、歌を作って棒で岸をたたけば夫人を見つけ出すことができますよ」という。そこで公が老人のいうとおりにすると、龍が夫人をささげて海から出てきて差し出した。公が夫人に海の中のことを聞くと、「色々の宝石でできた宮殿で、食べ物はおいしく柔らかく香ばしくさっぱりしていて、世間で料理されるものではありませんでした」という。夫人の着物からは不思議な香りが漂って、世間では嗅いだことのないものであった。

水路夫人は絶世の美人であったために、いつも深い山や大きい池などを通りすぎる際は、しばしば神にさらわれるのであった。・・・「水路夫人」（『三国遺事』卷二「紀異」）

以上に示された文は、「水路夫人」（『三国遺事』卷二「紀異」）条における龍に関連する部分を取りあげたものである。ここからは、先ず、海域にも龍が棲息していることが確かめられ、更にはその龍により海中へさらわれた後、夫の純貞公および大勢の人間の歌の力により救出された水路夫人の証言から、常人としては知る余地のない海中龍の住处、いわゆる「龍宮」の様子が

見聞きできている。その様子を確認してみれば、

1. 海中龍は龍宮に住んでおり、その宮殿はさまざまな宝石でできている。
2. 龍宮の食べ物は人間世の調理物とは異なっており、それはおいしく柔らかく香ばしくさっぱりしている。

という2点を取りあげられる。この証言はそれほど多くのことを語っているとは決していけないものである。しかし、時の人々が海中世界をどのように認識していたかはある程度推し測れるものであろう。先ず

その1、海中龍は龍宮に住んでおり、その宮殿はさまざまな宝石でできているとするものである。この証言からは、海中の世界が人間世界同様一つの物質界として存在するという、そしてそこには水の支配者たる龍が棲息していると考えられていたことが推し測られる。^{註4}

その2、龍宮の食べ物は人間世の調理物とは異なっており、それはおいしく柔らかく香ばしくさっぱりしているとするものである。この証言からは、龍宮の食物が人間世のそれに勝っているという意を持つのみならず、龍宮の世界全体が人間世の想像を凌駕する良いもので満ちている世界、引いては非常に神秘的な世界であることを暗示している。龍宮戻りの水路夫人をとり囲むみなは、夫人よりこのような証言が得られた後、彼ら自らの嗅覚により夫人の着衣に漂っている世間では嗅いだことのない不思議な香りに接する。そのために、水路夫人の証言がはなはだ神秘的すぎて怪訝、ある意味には荒唐無稽にさえ聞こえるものであろうとも、果たして信じないわけにもいかないという結果につながる。つまり、彼らの嗅覚により確かめられた夫人の着衣に漂う不思議な香りは、海中世界の神秘を生で体験させてくれる証拠そのものであり、それ故に人々は海中世界へと更なる想像力を描きたてるのである。

さて、ここで生身の人間が龍宮に入る動機を尋ねてみれば、それは二通りに分けてみることができる。その一つ目は、上記引用の「水路夫人」（『三国遺事』巻二「紀異」）条のように、龍にさらわれての入宮、その二つ目は、龍の要請および招聘による入宮である。先ず、龍にさらわれての入宮であるが、これは人間側の見方からすればはなはだ有るまじきことである。しかし、水路夫人のような絶世の美人は、美人であるがために不本意にも、深い山や大きい池などを通りすぎる際にしばしば神鬼にさらわれたりあるいは神鬼に犯されたりもしたものである。というのも、「処容郎・望海寺」（『三国遺事』巻二「紀異」）条には、処容の妻があまりにも美しかったがために、疫病神が人の形を借りて彼女を犯すことが記されており、さらに「桃花女・鼻荊郎」（『三国遺事』巻一「紀異」）条においても、沙梁部の百姓の娘である桃花女の姿かたちがあまにも美しかったがために、死後の真智大王が生きていた時と同じように現れ、彼女と七日間同居したと記されている。これらの類は、そのいずれもが美人であるがために不本意にも見舞われた神鬼からの災難で、実世界の人間としてなるべく避けたい経験であるということができよう。このように、龍にさらわれての入宮が人間にとって大分否定的な側面を帯びることに対し、その二つ目の龍の要請および招聘による入宮は肯定的な側面を帯びるものとして捉えられる。それは、

例えば、「明朗神印」（『三国遺事』巻五「神呪」）および「宝壊梨木」（『三国遺事』巻四「義解」）条において、

1. 明朗法師および祖師知識など、入宮を要請乃至招聘される僧は決まって中国にわたり仏教の奥義を得た名僧に限るもので、帰国の途中それを龍に伝授できるチャンスを得ていると強調される点、
2. このような入宮の事実が当該僧の修行の靈力を明かす事実として認識され、経歴に箔をつける結果をもたらしている点、^{註5}

などから確認できる。しかし、龍宮への入宮という経験は、その動機が両者中のいずれであるにせよ、人間世の常人としては得がたいものである。ということは、龍宮の世界というのは人間世とは区別される世界であることが明確である。

以上のことから、水神としての龍の住処は、小にしては井戸、泉、池において、大にしては大海に至るまでに及んでいることが確認できた。ところが、上述してきた内容から考えるに、小の井戸、泉、池と大の大海の別というのはそれほど大きな意味を持つものではないように思われる。というのも、前掲の「真聖女大王・居陀知」（『三国遺事』巻二「紀異」）条における西海の神は、名は西海の神でありながらその住処は西海上の一個の島、鵠島にある神池に置いているものとしており、前掲の「元聖大王」（『三国遺事』巻二「紀異」）条では、東泉寺の泉を東海の龍が往来し法文を聞くところとし、そのいずれの記事においても、龍は水域であるならその大小に関係なく臨機に随意に往来しながら棲息するものであると記されるからである。

b) 龍城国

1-22、・・・もてなしを受けること七日経った時に、子供がこういった。「わたしはもと龍城国のもので〔正明国または玩夏国ともいう。玩夏は花夏国とも書くが、龍城国は倭の東北、一千里のところにある〕、わたしの国には二十八の龍王がおります。みな人の胎内から生まれたものですが、五・六歳頃に王位を継ぎ、万民を教え、性命を正しくします。八品（八つの官等）の姓骨（血統上の階級的等級）があるにはありますが、例外なくみな大位にのぼるのです。時に父王の含達婆が、積女国の王女を迎えて妃にしましたが、長いこと子種がなかったので、お祈りをして子種を願ったところ、七年後に大きな卵を一個産みました。そこで大王が臣下たちを集めて、「人が卵を産むということは、古今にその例がない。これは吉祥ではないであろう」といわれました。そこで箱を造りわたしをその中に置き、七宝と奴婢を船いっぱい積み、海に浮かべてから、「因縁のある地について、国を建て家を起こしなさい」と祈りました。するとにわかには赤い龍が現れて船を護衛し、ここについたのです」と。・・・「四脱解王」（『三国遺事』巻一「紀異」）

以上に示された文は、「四脱解王」（『三国遺事』巻一「紀異」）条の龍に関連する部分を取りあげたものである。ここからは、鷄林の東、下西知村の阿珍浦についた船の櫃の中にいた端正な男の子が自らの出自を語る話をとおして「龍城国」の様子を知ることができる。「正明国また

は玩夏国、花度国とも書く龍城国は、倭の東北一千里のところにある。その龍城国には二十八の龍王がおり、みな人の胎内から生まれるもの。五・六歳頃に王位を継ぎ、万民を教え、性命を正しくする。八品（八つの官等）の姓骨（血統上の階級的等級）はあるが、例外なくみな大位にのぼる。云云」。以上が出自話をとおして語られた龍城国の様子で、ここに記述される龍城国は、言葉の響きからして前節で見てきた海中の龍宮、その龍宮がある国という印象が強い。ところが、「龍王、みな人の胎より生まれる」という部分などがあり、あたかも龍神と人間の世界が混沌としているかのようにさえ感じる。実状これは、持ち前の知略で新羅の第4代目の王座を占める脱解王の英雄的誕生を構成する部分で、龍城国というのも脱解王の出自に権威を持たせるため行われた説話的潤色と考えられる。というのも、この説話の龍に関連する部分の構成が、

1. 龍王と結合する王女から、
2. 祈子七年の末に大きな卵で生まれ、
3. 「人が卵を産むということは吉祥ではないであろう」と箱舟に載せて海に流され（捨てられ）、
4. 鷗林の東、下西知村の阿珍浦について保護され、
5. 新羅の4代目の王となる。

となっていて、それがいたって英雄誕生の説話と合致しており、王座を占める脱解王の英雄的出自という感想が強くなっているためである。そう考えれば、龍城国とは前節で見てきた海中の龍宮、その龍宮がある国というものであるより、脱解王の英雄的出自構成の過程で設定された倭の東北一千里のところ、つまり海のかなたに存在する一つの靈威なる国というふうに解釈されるべきものであろう。

B、その他

1) 寺院の龍王堂

3-22、・・・新羅末の普耀禪師は二度も呉越に行って大藏經を船に載せて帰ってきた。彼は海龍王寺の開山祖師であった。・・・また大定（金の世宗の年号）年間（1161～1189）の『漢南管記』に彭祖述が詩を載せて、「水雲の間の蘭若（寺）は仏の御座すところ、さらに神龍、この一境を安穩ならしめたり、ついぞこの名利をだれぞ継がん、初めて仏教南方より伝えたり」といい、その跋文に「昔、普耀禪師が始めて南越より大藏經を求めてくる時、海風がにわかになり、小さい船が波間に浮いたり沈んだりしていた。禪師は〔おそらく神龍が藏經をここに留めておこうとするのだろう〕といい、そこで呪文を唱えながら誠意を込めて願をかけ、龍とともに大藏經をささげ持ち帰ってきた。ここで風もなぎ波も静まった。帰国後は山や川をあまねく歩き回りながら、安置できる場所を探し求めていた。この山に至ると突然、山上に瑞雲が湧きあがるのを見て、高弟の弘慶とともに寺を建てた。だから仏教の東漸は、実際にはこの時に始まったのである。」と述べ、「漢南管記、彭祖述は題す」と書いてある。この寺には龍王堂があつて、すこぶる靈異な出来事が多かった。龍王はその時大藏經に伴ってきたものであるが、今もなおその堂にいる。・・・「前後所將舍利」（『三国遺事』卷三「塔像」）

以上に示された文は、「前後所将舍利」（『三国遺事』卷三「塔像」）条の龍に関連する部分を抜粋して取りあげたものである。ここからは、普耀禪師が開山した海龍王寺の龍王堂をその住処にしてすこぶる靈異さを示している龍の記事をとおして、仏教寺院内に棲息している龍のことが確認できる。仏教寺院内に龍が棲息するという事実は、前節で言及した仏教世界における龍の護教的性格¹⁶からして、さほど無理のない帰結として受けとめられるものであろう。しかし、今は海龍王寺内の龍王堂をその住処にしているこの龍であるが、そのもとの住処をたどれば、それは南中国から新羅に向かう海路つまり西海であった。その西海に棲息していた龍が、如何なる経緯で龍王堂へとその住処を移すようになったのか。その経緯は、説話形成の要因となる重要なモチーフ別に3段階に分けてみる事ができる。

1. 新羅末の普耀禪師が南中国から大蔵経を持ち帰る際、荒波に会い船が危うくなる。
2. 普耀禪師が、荒波の起こりは師が携行する大蔵経に思いを馳せた龍が起こすものであると気づき、呪文を懇請に行くことにより、龍は普耀禪師とともに大蔵経を護衛してくる。
3. 普耀禪師が吉地に海龍王寺を開山し大蔵経を安置し、龍はその海龍王寺の龍王堂に住みつき、仏法のために捧持する。

以上に示した3段階における重要モチーフは、そのいずれもが龍関連の説話形成の思想的背景になる観念に連携するものであるといえる。その詳細を解いて見れば、

その1、新羅末の普耀禪師が南中国から大蔵経を持ち帰る際、荒波に会い船が危うくなるというモチーフは、「海域の水神なる龍の存在は、往々にしてあたりのおおしけあるいは波風の大荒れなどの天候の変化で表出される」という観念と関連する。たとえば、前掲の「真聖女大王・居陀知」（『三国遺事』卷二「紀異」）条においては、鵠島の神池に棲息する西海の龍が、鵠島周辺の海が大いにしけ十日間にも及んで船が出せないという天候の異変を起こすことによって、船人たちに自らの存在を表出している。そして、上部引用の「処容郎・望海寺」（『三国遺事』卷二「紀異」）条においても、東海の龍が、憲康大王一行が休んでいる河辺を、道さえ見分けられないほどに雲と霧で覆うという天候の異変によって、憲康大王一行に自らの存在を表出している¹⁷。

その2、普耀禪師が、荒波の起こりは師が携行する大蔵経に思いを馳せた龍が起こすものであると気づき、呪文を懇請に行くことにより、龍は普耀禪師とともに大蔵経を護衛してくるというモチーフは、

- 1) 仏の教えを慕う龍の観念、
- 2) 仏教世界における陀羅尼呪文信仰の観念、
- 3) 護船する龍の観念

に関連している。

1) 仏の教えを慕う龍の観念は、『妙法蓮華経』の「序品」¹⁸において、「難陀龍王、ウパナンダ龍王、サーガラ龍王、ヴァースキ龍王、タクシャカ龍王、マナスヴィン龍王、アナヴァタプタ龍王、ウトパラカ龍王の八大龍王およびその従者の龍・幾千万億ものの龍が釈尊の説法を聞いて

た。」と示され、同経の「提婆達多品⁹」において、「サーガラ龍王の八歳の娘が文殊師利の説く妙法蓮華経を修行し悟りに到達した」と、その有名な变成男子の事件が扱われていることから察せられるように、各種の仏教經典には随所に描写されているものである。それが新羅における仏教の隆盛と相俟って当時の人々にも違和感が認められないほど一般化している様子は、前掲の「元聖大王」（『三国遺事』巻二「紀異」）条において、東泉寺の泉が東海の龍が往来し法文を聞くところであるとしているところ、「明朗神印」（『三国遺事』巻五「神呪」）および「宝壤梨木」（『三国遺事』巻四「義解」）条において、西海の龍が名僧の入宮を要請乃至招聘し、仏法を伝えさせたりあるいは経を唱えさせたりしているところなどから確かめられる。

2) 仏教世界における陀羅尼呪信仰の観念は、『妙法蓮華経』において、「それを身につけているにせよ、書物にしているにせよ、これを護持する良家の子女たちを保護し防衛し庇護するための陀羅尼呪」、「教えを語る人々のために、彼らの弱点を探し襲撃の機会を狙うやからがその機会を得ないようにするための陀羅尼呪」、「教えを語る人々の利益や幸福のために、彼らに対する憐れみの心から、彼らを保護し防衛し庇護するための陀羅尼呪」など、全巻を陀羅尼呪で埋めつくした「陀羅尼品¹⁰」が据えられていることから察せられるように、これまた仏教的色彩が非常に強いもので、釈尊在世当時から伝承され今日にまで至っているものと考えられる。いわゆる陀羅尼呪とは、仏の教えの精要で、神秘的な力があると信ぜられた呪文のこと。禪を護持し悪を防ぐ神秘的な力が特定の言葉に宿り、その言葉を唱えることによりその力を受け取ることができると考えられ、それに働きかけることにより自然力あるいは神や人間の行動を積極的に統御しえると信じられたものである。普耀禪師は、この陀羅尼呪を懇請に行うことにより、荒波を起す龍を統御しえるのみならず大蔵経を護衛してくるものとすることができた。

ところで、陀羅尼呪信仰のような観念は、人間の生活から自然発生的に生じる現世利益のための祈願行為と相通する側面を持つものであるから、新羅社会においても伝統的な生活意識の一面として存在していたものとして理解でき、それが当時の人々にとって仏教における陀羅尼呪信仰をも違和感なく受け入れられ習俗として定着させるにいたったものであろう。前掲の「元聖大王」（『三国遺事』巻二「紀異」）条においては、河西国の二人が、呪文をかけることにより、東池・青池の二龍および芬皇寺の井戸にいる龍などの三龍を小さい魚に変身させ筒の中に入れて唐に持ち帰ろうとしていることが記され、「真聖女大王・居陀知」（『三国遺事』巻二「紀異」）条においては、坊主に化けた老狐が呪文を唱えながら池を三周することにより、神池の龍族をみな水の上に浮かばせ、その龍族の肝臓を取り出して食べつくしているモチーフが見える。これら両条における龍は呪文力の甚大さによって災難に見舞われる結果となっており、それは、本条における龍が、普耀禪師が呪文を懇請に行うことにより大蔵経を護衛して新羅に入国する結果になることとともに、呪文力を固く信仰する当時社会の観念の現れであると読み取れる。

3) 護船する龍の観念は、たとえば、前掲の「真聖女大王・居陀知」（『三国遺事』巻二「紀異」）条においては、新羅から唐へ使臣として旅立つ阿飡の良貝公についていく居陀知が、一人鵠島に残され、秀でた弓術で西海の龍神を危難から救った後、その龍神は二体の龍に命じて居陀知を抱えて使臣の船に追いつかせ、さらにその船を護衛して唐につかせたと記しており、「四脱解王」（『三国遺事』巻一「紀異」）条においても、龍城国の国王が卵生したわが子を吉祥ではないと思い、箱の中に置いて船に積み、因縁のある地について国を建て家を起こすようにと祈願して海に浮かべたところ、にわかには赤い龍が現れて船を護衛したと記し、航海の安寧をつかさど

る水神としての龍の側面をもっともダイレクトに伝えている。それに対し、この「前後所將舍利」（『三国遺事』卷三「塔像」）条における護船する龍は「普耀禪師とともに大蔵経を護衛してくる」という描写で、護船する龍の姿より仏教世界における龍の護教的性格が一層強調された表現になっている。

その3、普耀禪師が吉地に海龍王寺を開山し大蔵経を安置し、龍はその海龍王寺の龍王堂に住みつき、仏法のために捧持するというモチーフは、上述の仏教における龍の護教的性格に関連しているものとして解釈できよう。このほか「宝壤梨木」（『三国遺事』卷四「義解」）条にも、西海の龍が中国から帰国する新羅の名僧に従って新羅に入り、その後寺の境域に住処を置いて法化を助けるというモチーフが見えている。ただし、そこには、「祖師知識が中国において法を伝授してから帰ってくる時、西海の中の龍が宮中に迎え入れて経を唱えさせ金箔錦の袈裟ひと揃いを施し、併せて一人の龍の子・璃目を与えてお供をさせて帰らせている。帰国した祖師は鵲岬に鵲岬寺を建てて住んだが、龍の子・璃目はいつも寺のそばの小池に住んでいて、ひそかに法化を助けていた。」とあり、西海からついできた龍が寺のそばの池、つまり水域に住処を置くことにより龍の水神としての側面がより明確に示されている。

さて、『三国遺事』には、龍が寺院に住処を置くあるいは一時的に寺院に出入りをするというモチーフの説話が数多く存在する。たとえば、前掲の「元聖大王」（『三国遺事』卷二「紀異」）条において、芬皇寺および東泉寺という寺院の境内の井戸および泉に龍が棲息する例がこれにあたり、上部引用の「万波息笛」（『三国遺事』卷二「紀異」）条において、「神文大王が東海のほとりに今は亡くなって東海の龍となっている父・文武王のために感恩寺を建て、寺の金堂の階下には龍が寺に入ってきて絡みまつわるための備えとして東向の一穴を設けている。」とある例もこれにあたるものである。さらに、「皇龍寺九層塔」（『三国遺事』卷三「塔像」）条においては、「慈蔵法師が唐に留学して太和池のほとりを通る時、にわかに出てきた神人は、[皇龍寺の護法龍はわたしの長男で、梵天王の命を受けてその寺を保護している。本国に戻って、その寺に九重塔を建てれば隣国が降伏し、それに九韓もきて朝貢し、王業が長らく太平になるであろう。塔を建てた後、八閤会を設け、罪人を赦せば、外賊が害を与えることができない。さらにわたしのために京畿の南岸に一棟の精舎を作って、一緒にわたしの福を祈ってくれたら、わたしもまた徳に報いるであろう。]といい終わると、玉を奉じてささげ、それから急に姿を隠して見えなくなった」とあり、「皇龍寺の護法龍はわたしの長男で、梵天王の命を受けてその寺を保護している。」というくだりからすれば、寺院にはあたかも護法のために必ずや龍が住みついているような感さえ受ける。そのいずれもが、龍が寺院の境域に住みつき、仏法のために捧持するという観念の普遍化に関連する説話群と見ることができよう。

2) 天

2-2、・・・明年壬午(682)五月初一日[ある本には天授元年となっているが間違いである。]、海官波珍喰の朴夙清が、「東海に小さな山が浮かんで感恩寺の方へ向かってくるようで、それが波間に行ったり来たりしています」という。神文王がそれを不思議に思い、日官の金春質[あるいは春日とも書く]にこれを占わせると、「亡くなられた父が今は海龍となって三韓を鎮護し、それに金庾信は三十三天の一子として今回下界に降りてきて大臣になっていたのです。二人の聖人が徳を同じくして城を守る宝をくださろうとしていますから、もし陛下が海辺に行かれますと必ずこの上なき価値を持ち合わせた宝物が得られるでありますよ」といった。王は喜び、その月の七日に利見台にお出ましになってその山を見、使者を使わして調べさせた。山の形は亀頭のように、その上には一もとの竹があって昼には二つ、夜には一つに合わさる。[あるいは山も竹のように昼夜開いたり合わさったりするという]。使者が帰ってきてそのとおりに申しあげた。王は感恩寺に宿泊した。翌日の十二時に竹が合わさって一つになると、天地が揺れうごき、風雨が起り七日間も暗かった。その月の十六日になるとやっとな風が収まり波も静まった。王が船に乗ってその山に入ると、龍が黒い玉帯をささげるのであった。神文王が龍を迎え入れて一緒に坐り、「この山と竹が時には分かれ時には合わさるのはいったいどうしたことか」と尋ねると、龍は「たとえば片方の手のひらで打つと音がなく、両方の手のひらで打つと音がするのと同じです。竹というものは合わされて初めて音が出るものです。聖王が音声でもって天下を治めるめでたい兆候であります。この竹で笛をこしらえて吹けば、天下が平和になりましょう。今王の父君は海中の大龍となられ、庾信もまた天神となられました。そして二聖が心を同じくして、この上なき価値を持ち合わせた宝物をわたしに持たせ王にささげるようにいつけられたのです」と答えた。王は驚き且つ喜び、五色の錦彩と金玉を与えその礼を現した。使者に竹を切らせて海からでると、山と龍が急に見えなくなった。

王は感恩寺に宿り、十七日には祇林寺西の溪流のほとりに車を留めて昼飯を取った。太子の理恭は宮中で留守番をしていたが、この消息を聴きつけ馬を走らせてお祝いの礼をし、おもむろに(宝物を)調べてから、「この玉帯の各片はみな本物の龍であります」といった。王が「どうしてそれがわかるか」と尋ねると、太子が「一片を取って水に浮かべてご覧にいれます」といった。そこで左側の二番目の片を取って溪流に入れると、たちまち龍に変わって天に昇りその地は淵となった。よってそれを龍淵と名づけた。・・・「万波息笛」(『三国遺事』卷二「紀異」)

以上に示された文は、「万波息笛」(『三国遺事』卷二「紀異」)条における龍に関連する部分を取り上げたものである。ここからは、溪流に放たれた龍が天に昇るというモチーフが確認できる。ところで、この説話において、龍はなぜ天に昇るのか。結論からすれば、それは天龍＝龍が水神としての側面のみならず天界の神々と相通する、あるいは天の神々を捧持するという龍の神聖性に関連するもので、ここでは神文王が東海中の幻の島に出かけ、そこに出現した龍から手に入れた玉帯がどれほどの価値を持ち合わせた宝物であるかを明かす証左となっている。以下、段階を追ってこの説話の構成を考察することによりそれを明確にしてみよう。

1. 神文王が父王・文武王のために東海のほとりに感恩寺を建てる。
2. 東海に出現した小さな山のようなもの一あたかも浮いて感恩寺の方へ向かってくるよう

にみえる一に対し、占いの啓示—それは文武王および金庾信の二聖から「城を守る宝」が得られるための吉祥だ—を得る。

3. 亀の形をしたその山を見に出かけた神文王が、龍から黒い玉帯を手に入れる。
4. 太子が、玉帯の各片がみな本物の龍であることを見抜き、その一片を取って水に入れることにより、玉帯の神威力を証明する。

この説話の構成は各モチーフ別に上記の4段階に分けて見ることができる。各モチーフ別の詳細を見れば、

その1、神文王が父王・文武王のために東海のとりに感恩寺を建てるというモチーフである。それは、当時の社会風習が、「死んだモノのために仏教的行事を行って供養をすれば、それは必ず死者の冥福の資本となる」とごく普通に信じられ行われていたことと関連するもので、これより以前、神文王の父王・文武王が自らの遺言によって東海の中に葬られたという歴史的事実を踏まえて行われたものである。

その2、東海に出現した小さな山のようなもの—あたかも浮いて感恩寺の方へ向かってくるようにみえる一—に対し、占いの啓示—それは文武王および金庾信の二聖から「城を守る宝」が得られるための吉祥だ—を得るというモチーフは、これまた当時の社会風習が、日常で起こるさまざまな出来事に対し、常に「神意を問うこと」を怠らなかつたことに関連する。たとえば、前掲の「真聖女大王・居陀知」（『三国遺事』巻二「紀異」）条において、阿飡の良貝公が唐への使臣として行く時、鵠島付近で海が大いにしけ十日あまり船を出すことができなかつた時にも、公が心配して人に占わせたとあり、そして、「洛山二大聖・観音・正趣・調信」（『三国遺事』巻三「塔像」）条においても、岬山寺の祖師・梵日が洛山の麓の村・徳耆坊の石橋の下の水中から引き出した正趣菩薩像のために寺を建てる場所を選ぶにあたって占いで吉地を決めている。さらに、前掲の「四脱解王」（『三国遺事』巻一「紀異」）条においては、「鷄林の東、下西知村の阿珍浦に一個の櫃を載せた未知の船が辿りついた時、その浦辺の老婆・阿珍義先は例の船を引いてきて林の木の下につなぎ、その櫃を開けるのが一体吉なのか凶なのかかわからないので、天に向かって誓いの言葉を申しあげてから櫃を開けた」として、ほとんど聖俗・公私・男女区分なしで占いを尊重する習俗があつたように見受けられる。

その3、亀の形をしたその山を見に出かけた神文王が、龍から黒い玉帯を手に入れるというモチーフは、「龍からの貴重な献物」の観念に関連する。たとえば、前掲の「真聖女大王・居陀知」（『三国遺事』巻二「紀異」）条において、わが娘で妻にさせましようという龍女の献上、そのほかに、上部引用の「皇龍寺九層塔」（『三国遺事』巻三「塔像」）条の新羅の皇龍寺の護法龍を長男として持つ中国の太和池の神人の慈蔵法師にまみえての玉の献上、「洛山二大聖・観音・正趣・調信」（『三国遺事』巻三「塔像」）条の東海の龍の義湘法師に如意宝珠一顆の献上、「關東楓岳鉢淵藪石記」（『三国遺事』巻四「義解」）条の大淵津の龍王の真表律師に玉袈裟の献上、「明朗神印」（『三国遺事』巻四「義解」）条の西海の龍の明朗神人に黄金千両の献上、および「宝壤梨木」（『三国遺事』巻四「義解」）条の西海の龍の宝壤禪師に龍子の献上など、献物の

内容も様々でさらに献物の動機も多彩である。ここにおいては、神文王が手に入れた龍からの献物が黒い玉帯であったことにちなみ、龍の献物の内容においては玉と関連するものが相当あるということを記し、玉の宝物としての価値が新たに注目されるに足るものであることのみ指摘しておくことに留まる。

さて、このようなモチーフの一連の結構を経て手に入れた黒い玉帯であるが、やはり「黒い玉の帯」という一個の物質が、何をもって、海中の大龍となり三韓を鎮護する文武王と三十三天の一子として新羅に降って大臣になり、死後は天神となった金庾信の二聖からのこの上なき価値を持ち合わせた宝物、つまり城を守りぬく神秘的な威力を備えた宝になるのか、その決定的証明が必要となる。この後の展開はその証明と関連する。

その4、太子が、玉帯の各片がみな本物の龍であることを見抜き、その一片を取って水に入れることにより、玉帯の神威力を証明するというモチーフは、「天龍＝龍が水神としての側面のみならず天界の神々と相通する、あるいはその神々を捧持するという龍の神聖性」の観念に関連する。水神なる龍の天龍あるいは昇天の発想は、水に同系なる雲霧が空に浮かび空から降りそそぐことから容易に接点が見つけれられるものであるが、『三国遺事』には、天龍あるいは昇龍に対する直接的な記事は見当たらない。しかし、「北扶余」（『三国遺事』巻一「紀異」）条には、「宣帝の神爵三年壬戌（BC59年）四月八日、天帝が訖升骨（升紇骨）城〔大遼の医州の地にある〕に降りてきて、五龍車に乗り、都を定めて王と称し、国号を北扶余とし、自ら解慕漱と名のる。云々」とあり、地上世界を治める大役にあたり天より下界へと下降した天孫が五龍車に乗って運行すると記される。これはまさしく天龍＝龍が水神としての側面のみならず天界の神々と相通する、あるいはその神々を捧持するという龍の神聖性観念の現われであるといえる。

3) 人間界

2-14、第四十九代、憲康大王（875～886）の時代には、京都から海の入口にいたるまで家と塀とが相連なり草葺きの家は一軒もなく、道には笛の音、歌の聲が絶えることなく、風と雨が四季をつうじて順調であった。

そのころ大王が、開雲浦〔鶴城の西南にあり、今の蔚州である〕に遊んでからちょうど帰ろうとしていた。お昼にあたったので河辺で休んでいると、にわかにかに雲と霧が立ちこめて道さえ見分けられないほどであった。それを怪しく思い左右のものに聞いてみると、日官が、「これは東海の龍の仕業でありますから、何か良いことをしてこれを解くべきであります」と申しあげた。そこで担当の役人に命じ、龍のために近所に寺を建てるようにさせた。王の命令が下りると雲が晴れ霧が散った。それでその場所を開雲浦と名づけた。東海の龍が喜んで子供七人を従えて王の前に現れ、徳をたたえながら舞い音楽を奏でた。そのうちの一人の子は王の行幸に付き添って都にのぼり政治を補佐した。名前を処容と名づけた。王は美しい女を彼に娶らせて留めおこうとし、また級干の職を与えた。

彼の妻はあまりにも美しかったので疫病神が惚れ込み、人の姿に化けて夜その家に行きこっそり共寝をした。処容が外から家に戻ってきて寝室に二人が寝ているのを見ると、歌を歌いながら舞を舞いそこから出ていった。その歌は次のとおりである。

みやこ 月の明き夜 遊びて 夜ふけ帰れば
 わが寝屋 内に脚よつ
 ふたつは 女房の 残りふたつは 誰かもの、
 もとわれのものとして 盗られては はて術もなし。

その時、疫病神がもとの姿を現して前に跪いて、「わたしは公の妻に恋慕していま過ちを犯してしまいました。だがあなたは怒ろうとしない。ありがたく見上げたことでございます。誓いますが、今後は貴公の姿を描いたものさえ見れば、決してその門の中には入りません」といった。このことがあってから国の人々は処容の姿の絵を門に貼って邪気を追いはらい幸運を迎え入れるようになった。

王が京都に帰られてから霊鷲山の麓の景色のいい地所を選んで寺を建て、望海寺または新房寺と名づけた。・・・（「処容郎・望海寺」（巻二「紀異」）

以上に示された文は、「処容郎・望海寺」（『三国遺事』巻二「紀異」）条の龍に関連する部分を取りあげたものである。ここからは、人間界の人間として生活する龍の姿が確認できる。つまり、本来は東海に棲息していた龍の七人子供のうちの一人が、王の行幸に付き添って都にのぼり政治を補佐するといういわゆる「龍子輔政説話^{註12}」として存在し、その龍の名前は処容と言う。このような「龍子輔政説話」の結構はもちろん龍の護国的性格と関連するものであるが、他にも鬼神の類が王政を補佐するという観念があったこととも関連するものであろう。たとえば、「桃花女・鼻荊郎」（『三国遺事』巻一「紀異」）条においては、真智大王の死後霊と交感した沙梁部の百姓の娘である桃花女から生まれた鼻荊が、真平大王より宮中に招き入れられ育てられ、十五歳になるや執事役に任ぜられていることや、さらに真平大王が鼻荊に、「鬼神たちのうちに、人間となって政治を助けるようなものはいないか」と尋ね、鼻荊から紹介された吉達に執事の役職を与えたところ、忠実なことは他に比べものがないほどであったとある類がこれに相当する。

さて、この条文におき、龍が人間になる時の様子には如何なる説明も敷衍もされておらず、それでもなんら違和感なしに受けとめられている。水神なる龍が人間界の人間の様子で現れるのは、たとえば前掲の「元聖大王」（『三国遺事』巻二「紀異」）条において、唐使に同伴してきた河西国の人に捕らえられていく二龍の妻が、自分らの夫である二龍と芬皇寺の井戸の龍が新羅に留まれるよう頼むために、二人の女の姿で元聖大王の朝廷の内庭に入ってきている。同じく前掲の「真聖女大王・居陀知」（『三国遺事』巻二「紀異」）条において、西海の水神たる龍を絶命の危機から救いだし、そのお礼に一枝の花に変えられた龍の娘を懐の中に入れて戻ってきた居陀知が、その花の枝から変身した女と一緒に生活したとある。以上からすれば、龍は水界に棲息する時には龍として、そして水界を離れ人間界に赴く時は人間として変身できる技を備えているものとして、つまり、龍を神人同性同体の観念で把握し

ていたことが確かめられる。ところが、龍を神人同性同体の観念で把握することに相対し、「龍は靈異ではあるがやはり水界の存在」として区別したり、時には「人間に劣る存在」として把握する思考も見られる。たとえば、上期引用の「宝塚梨木」（『三国遺事』巻四「義解」）条においては、祖師知識が中国において法を伝授してから帰ってくる時、西海の中の龍が彼を宮中に迎え入れて経を唱えさせ、金箔錦の袈裟ひと揃いを施し併せて一人の龍の子・璃目を与えてお供をさせて帰らせているところ、「その璃目はいつも寺のそばの小池に住んでいて、ひそかに法化を助けていた。」とあり、龍は靈異ではあるがやはり水界の存在として人間界の人間と区別している思考がうかがえる。さらに、前掲の「水路夫人」条においては、一人の老人が龍にさらわれた水路夫人を救い出す策を申し述べる際に、龍を海中の生物＝海中傍生と見下した名で呼んでいるくだけりがあり、「文虎王・法敏」（『三国遺事』巻二「紀異」）条においては、遺言により東海中の大岩の上に葬られた文武王が生前に智義法師と交わした会話において、王が智義法師に、「朕身は後に護国の大龍となり、仏法を崇奉し、国を守護したい」と述べたところ、法師が、「龍は畜生道の応報になりますけどどういたしましょう」と聞きかえした。云々のくだけりがある。これらの記事から見る龍は人間より劣るものとして格付けされており、「龍は靈異ではあるがやはり水界の存在」として人間とは一線を画するものとして認識していたことが確かめられる。

3、龍の危難とその説話的展開

前章において、龍の住処を辿ることにより見てきた龍の性格を概略すれば、新羅時代中心の韓民族社会における龍は、基本的に水の支配者としての性格が中心に据えられ、その他仏教界、天界、人間界へと敷衍しているものであった。そして龍はどの世界に住処をおこうともおおむねはその神聖性を保持するものであったと見られる。それに対し、「元聖大王」（『三国遺事』巻二「紀異」）および「真聖女大王・居陀知」（『三国遺事』巻二「紀異」）の両条に現れる龍は、それぞれ新羅を守護する護国龍、そして西海の王者たる龍王という尊位にいるにもかかわらず、いずれもが絶命の危難に瀕する姿を見せ、その意外性に驚かされる。それなら、これらの龍は何ゆえにこのように危難にさらされるようになるのか。結論を急げば、それは説話を語る人たちにとっての龍の存在が、水の支配者として信仰される神域の存在であることに加え、人々の生活の付近で神人が相互扶助する形で同居を図る精神によるものであると見える。以下、その具体像を検討してみよう。

「元聖大王」（『三国遺事』巻二「紀異」）および「真聖女大王・居陀知」（『三国遺事』巻二「紀異」）条の龍に関連する部分は前章に示したとおりである。それぞれの要旨は、前者が、「元聖王が、呪文によって捕らえられた三体の新羅の護国龍（東池と青池の龍および芬皇寺の井戸の龍）を救い出し、唐人からその明晰さを感服される」、後者が、「居陀知が、呪文によって危難にさらされた西海の神・龍神を救い出し、そのお礼として龍神の娘を妻にもらう」にまとめることができよう。ところで、この要旨の展開からみるこれら両条は、説話構成単位上のい

わゆるエピソードおよび挿話の個数、そして語り物としての潤色は大いに異なっているもののその結構は、

1. 危難にさらされる龍
2. 龍を救い出す英雄
3. 救出による報い

の三段階の同形式に分類でき、さらに、危難にさらされる龍の敵対者が用いる敵対手段が呪言つまり陀羅尼である点、救出による報いが中国大陸の使臣と関連する点などから、両条が同タイプの説話だと考え各説話の展開相を捉える。

まずは、両条の内容をモチーフ別に分解し、その構成を解いておこう。「元聖大王」（『三国遺事』巻二「紀異」）条の構成は、以下のように提示できる。

- 1、危難にさらされる龍
 - 1) 唐使が二人の河西国人をつれて新羅へ入国する。
 - 2) 河西国人が呪文をかけ、三龍を小魚に変身させ筒に入れ、唐へ帰る。
- 2、龍を救い出す英雄
 - 1) 二龍の妻が化人し、元聖王に龍の救出を訴える。
 - 2) 元聖王が河西人から三龍を救う。
- 3、救出による報い
：唐使が元聖王の明晰さに感服する。

これに対し、「真聖女大王・居陀知」（『三国遺事』巻二「紀異」）条の構成は、以下のように提示できる。

- 1、危難にさらされる龍
 - 1) 良貝公の中国行き
 - 1) ' 良貝公が、弓士五十人を同行して、唐へ使臣として行く。
 - 2) ' 西海上の鵝島で荒波に見舞われる。
 - 3) ' それについて占う。
 - 4) ' 占いの結果とおりに神池を祭る。
 - 5) ' その夜、良貝公の夢に老人が現夢する＝弓士一人を島に残せというお告げ。
 - 6) ' 籤により弓士居陀知が島に留まる。
 - 7) ' 順風が起こり、船が進む。
 - 2) 危難にさらされる龍
：坊主が呪文をとねえ、龍族を水上に浮かせ、その肝臓を取りだして食べる。
- 2、龍を救い出す英雄
 - 1) 父の龍が化人し、居陀知に龍の救出を訴える。
 - 2) 居陀知が坊主から龍家族を救う。

1) ' 死んだ坊主が老狐に変わる。

3、救出による報い

1) 龍の娘を妻にもらう。

1) ' 娘を妻にさせようとする老人の申し出に、居陀知が許諾する。

2) ' 老人が娘を花に変え、居陀知の懐に入れる。

3) ' 帰国後、居陀知が懐から取りだした花が女になり、同居する。

2) 名誉と財物を手にする。

1) ' 老人が二体の龍に命じ、居陀知を抱えて使臣の船に追いつかせ、使臣の船を護衛させる。

2) ' 唐人が二体の龍が護衛する新羅船を見て、皇帝に陳述する。

3) ' 皇帝が歓待する。

1) "宴を張り群臣たちの上席に座らせる。

2) "金帛を与える。

A、危難にさらされる龍

先ず、「元聖大王」（『三国遺事』卷二「紀異」）条の構成における危難にさらされる龍のことである。それは唐使に帯同されてきた二人の河西国人がかける呪文により、新羅の護国の龍である三龍が子魚に変身させられ、筒に入れられ、唐へ連れ帰られることになる。当時社会における呪文に対する観念は、仏教における陀羅尼呪信仰の観念と引き合いに前章において述べてきたものである。ところが、その呪文の力により、新羅の護国の龍であったはずの三龍はとんでもない危難にさらされてしまい、龍の状況がこのようになってからは、新羅の護国龍も何も、もはや神格はその片鱗さえ維持できていないに等しい。ところで、ここにおける河西国人とは、今の中国の陝西、甘肅およびモンゴルのオールドス（鄂爾多斯）、アラ善、エチナ（額濟納）などの地に該当する黄河以西の地、つまり当時の中国からして隔絶されていた河西に籍を置くものたち。その人々が何故に新羅に入国しているのだろうか。そして唐からの使臣は何故に中国からしてもさらに西側に偏った異邦の土地人なる二人を新羅に帯同しているか。その理由は、この河西国人たちが呪文をあやつる特別な職能を備えていたからで、唐使は彼らの職能を買い、意図して彼らを新羅まで帯同していると見える。それは、

1. この「元聖大王」（『三国遺事』卷二「紀異」）条の展開が、特殊な職能を備え偉人ぶりを発揮する河西国人には如何なる重心も置かれず、ただ元聖大王の明晰さおよびそれに感服する唐使のみに置かれていること、
2. 「元聖大王」（『三国遺事』卷二「紀異」）条の構成において、このエピソードの挿入場所が2回にわたる日本からの使者とのしのぎを削る出来事が記録された直後に当てられていること、

などから確認できる。河西国人たちが呪文をあやつる特別な職能を備えていたという事実は、呪文をあやつること自体、人間世における物理的現象を超越する性格のものだから、河西国人だ

からとて彼らみなに呪文をあやつる職能が備わっているわけではない。ところが、唐代の小説集の白眉の一種である裴鏘の『伝奇』には、唐の開成年間、広東省、清遠県の峽山寺に、梵音に長けていて、ひとたび読経して錫杖を振り呪文をかければあらゆる物がそれに応じたもので、よく鬼神を捕らえ、魍魎魍魎を束縛した西域人の僧侶、金剛仙の偉人振りを奇異のテーマにした「金剛仙」²¹⁴条が所収されている。そこには、

「・・・それから数年後、金剛仙は番禺県に行き、船で天竺に帰ろうとした。そこで、峽山寺の金鎖潭の畔で、錫杖を振り大きな声で呼ばわりながら水に呪文をかけ、しばらくすると水が割れだしその底が見えてきた。澡瓶でそこを張っていると長さ三寸ほどの一匹のドジョウが瓶の中に跳んで入った。周りの僧侶たちには、[これは龍だ。わたしが広西省の博白県の海門鎮につけば、薬材で煮つめて軟膏にし、足に塗れば海を平地のように行くことができる。]とっていた。・・・」とある。ここで確かめられるのは、中国においても、西域人の中には（主に僧侶の類を想定しているものと思われるが）、呪文をあやつる特別な職能を持ち合わせていた人がいたと考えていたことである。そして、裴鏘の『伝奇』「金剛仙」条より確かめられるもう一つ大事なことは、金剛仙のあやつる呪文と龍のかかわり方である。それは、

1. 峽山寺の金鎖潭の龍が呪文により危難にさらされる。
2. その危難の内容は、龍がドジョウつまり小魚に変えさせられる。
3. 小魚に変えさせられた瓶に入れられ、よその土地に持ち込まれようとする。

というものである。ここに示される呪文とかかわる龍の説話上の展開は、今ここ「元聖大王」（『三国遺事』巻二「紀異」）条における展開と酷似していることが確かめられる。これは新羅社会における龍に対する認識が中国社会における龍に対する認識と深い関連性を保っていること、そして龍登場の説話の構成も、中国の龍登場の説話の構成と深い関連性を保っていることが指摘できる事実として受けとめられないだろうか。

次は、「真聖女大王・居陀知」（『三国遺事』巻二「紀異」）条の構成における危難にさらされている龍のことである。先ずは、2) 危難にさらされる龍のことが語られまでのことであるが、上で提示した構成から確かめられるように、1) 良貝公の中国行きのエピソードが挿入されている。その細部構成は、

- 1) ' 良貝公が、弓士五十人を同行して、唐へ使臣として行く。
- 2) ' 西海上の鵠島で荒波に見舞われる。
- 3) ' それについて占う。
- 4) ' 占いの結果とおりに神池を祭る。
- 5) ' その夜、良貝公の夢に老人が現夢する=弓士一人を島に残せというお告げ。
- 6) ' 籤により弓士居陀知が島に留まる。
- 7) ' 順風が起り、船が進む。

とつづき、これはこの「真聖女大王・居陀知」（『三国遺事』巻二「紀異」）条が、当時社会の風習、慣例などの項目を多彩かつ豊富に取り入れることにより、一条の芳醇な物語として完成されていることが見受けられる。

さて、水神なる龍はここでは何により危難に見舞われているのか。それは、化身術を得ている年老いた狐が化けた坊主が唱える呪文により、西海の水神たる龍王の一族が水上に浮かばれ、一体一体ずつ次々と肝臓が食われ死んでいくとしている。ここにおいても、龍は呪文の力が原因で甚だしく落ちぶれ、状況は神格の維持どころか絶体絶命の危機に瀕するものとなる。ところで、ここで呪文をあやつる存在は他でもない変身術を得ている年老いた狐である。周知のとおり、変身とは自らの意思やあるいは他意により、ある原形がその他の形態に変わる事。韓国民譚の変身説話を見れば、「動物が人間に変身する変身動物民譚がその主なパターンで、変身動物の出現頻度は蛇、狐、虎の順になる。・・・韓国民譚では、超自然的存在者たちだけではなく自然的存在者たちまでが、方術や年輪などにより自動的に自己意思による変身が可能である。」¹⁵と解説されるごとく、ここにおける狐も年輪により変身できる技を獲得し、人間になっているものである。以上で見るように、老い狐の人間への変身モチーフは、人間や生物において超自然的能力の収容が比較的自由であったと見える韓国的民衆意識からして自然なものであった。ところが人間に変身できたその老い狐は、さらに呪文力の助けを借りて水神世界までの統御を図ろうと試みることで新たな葛藤を生み出し、この葛藤がつぎの展開を誘発するモチーフとして機能している。

B、龍を救い出す英雄

前節においては、当時の社会が信仰していた呪文力により危難にさらされる龍のモチーフについて論じてきた。ところが、この場合の危難というものは自然界の正則からすれば均衡と調和から逸脱している境遇で、その当事者は如何なるものであろうとも救済による原状復帰が要求されるものである。

「元聖大王」（『三国遺事』巻二「紀異」）条において、龍の救済に当たる存在は元聖王である。危難にさらされた三体の龍の存在意義が国を守護することであったからには、王国の最高統治者に当たる元聖王がその救済者になることは至って順当なものであるともいえる。しかし、ここにおいて三龍の救済者が元聖王に当たる事由として、それ以上の意義を持つ所以が存在する。それは、元聖王の即位自体が新羅の都慶州の北側の神に祭祀をし、その神の助けがあったお陰で可能であったということ、そして元聖王代の盛大な治世は人生の窮達の変理を正確に認識していた王の明哲さもあるが、水神を中心とした超自然的存在の神威的な助力があったことによって可能であったことが示されるためである。元聖王の即位における北川神の助力に関連する記事の顛末は、

1. 元聖王がまだ角干として次宰であった時、一条の夢を見る。
2. 占い師から凶兆の夢だと告げられ、閉門する。
3. 阿飡の余三は「国王となる」吉兆の夢であるとし、上宰なる周元に先んじて王位につくためには都慶州の北側の神に祭祀をすれば可能であると告げる。
4. 元聖王が阿飡の余三の言葉とおりに北川の神を祭る。
5. 国の人々が上宰の周元を国王に迎えようとしたが、北川の北に家があった周元が大きな雨で急に氾濫した北川が渡れなかった内に、元聖王が宮殿入りして即位する。

というもので、このモチーフは、本条説話の構成における導入部として重要なパートを占めている。歴史における当の元聖王（新羅第38代王：785～798）は、前代の宣徳王（新羅第37代王：780～785）とともに、今までの王位を継いできた太宗武烈王系から、軍勢力・政治力で王位を奪い即位した奈勿王系の子孫で、その統治期は律令体制推進勢力と貴族体制復帰勢力との対立抗争が時代的特徴をなしていた時期である。つまり、元聖王は、王族であった真骨貴族が分裂するさなかにおいて、自らの実力により王位につきその座を守りぬいた人物。その元聖王の即位が、本条説話においては北川神の加護によって可能だったという導入部からはじめ、その人生は最後にいたるまで神仏のご加護により全うされたことで点綴する。前掲の龍の危難に関連する説話は、元聖王が一生涯に出合う数多くの例の神仏からのご加護エピソードの一つをなすものである。そのため、危難にさらされた三龍の内の二龍の妻は、特に懸念する様子なく人の姿に顕現して元聖王の内庭に出現し、三龍の救出を訴える。そして、元聖王もまた彼女らが語る超自然界の話に順応して聞き入れ、自らさっそく河陽館まで走っていき、河西人から当の三龍を救い出すのである。

「真聖女大王・居陀知」（『三国遺事』卷二「紀異」）条において、龍の救済に当たる存在は矢を射る特技を持ち合わせている弓士の居陀知という人物である。ところで、この居陀知が龍の救済に当たるまでの経緯をたどってみよう。それは、善徳女王の末っ子に当たる良貝公が使臣として唐へ行くに当たり、居陀知は、一行の護身のために帯同する弓士五十人中の一人として参加する偶然から始まっている。しかしその後、

- 1) ' 良貝公が、弓士五十人を同行して、唐へ使臣として行く。
- 2) ' 西海上の鵠島で荒波に見舞われる。
- 3) ' それについて占う。
- 4) ' 占いの結果とおりに神池を祭る。
- 5) ' その夜、良貝公の夢に老人が現夢する＝弓士一人を島に残せというお告げ。
- 6) ' 籤により弓士居陀知が島に留まる。
- 7) ' 順風が起こり、船が進む。

ここまでの一連の出来事は、弓士居陀知が龍の救済の任に当たることが神明の意によるもので、ただの偶然ではないことを認めさせる。というのも、ここまでの一連の出来事が重なった末、弓士居陀知は始めて池から姿を現した一人の老人に出会え、そしてその老人から、「自分こそは西海の神なる龍神で、云々」の危難にさらされている龍の境遇を知らされ、その龍の救済にあたる存在にされる。その後は、持ち合わせの弓術により龍の敵対者を倒すのみ。

さて、その後の展開を見れば、居陀知は、陀羅尼呪により龍を危難にさらす敵対者である坊主を、龍神にいわれたとおりに射あてている。老人により「龍族を危難にさらす悪しき存在」と告げられはしたものの法服をまとった僧侶を射殺す結果はどうなるのであろう。と思うや、矢に当たったその僧侶は老い狐となって地面に倒れ、意外性が次から次へとつづく。以上の展開からして、「真聖女大王・居陀知」（『三国遺事』卷二「紀異」）条の主眼は、龍の救済に当たる人物の設定、呪文による龍家族の危難、敵対者の退治（龍家族の救済）およびそれによる老い狐の変化などなど、多岐にわたって錯綜するモチーフとそれらの変化に富んだ結構などによる遊戯性そして文学性に置かれているものではないかと考えられる。

C、救出による報い

「元聖大王」（巻二「紀異」）条において、新羅の護国龍を危難にさらす呪文をかける人物は他でもなく唐使が帯同してきた河西人であり、それは唐使がその河西国人たちが呪文をあやつる特別な職能を備えているという彼らの職能を買い、意図して彼らを新羅まで帯同していることは前節で述べた。その意図とは、ストーリーの結末からして、彼らの呪文力を用いて新羅の護国龍を捕らえて唐へ持ち去ることにより、新羅を危難に合わせるためのものであったろうが、それはさて置き、唐使がそのような計略を持ち合わせて入国したことは誰一人知る由がないものであった。ただ超自然的方法であるにせよ、即位から玉座での生涯を終えるまで絶えず神仏のご加護にあずかることが多かった元聖王であったがために、今回もまた龍神の助力を得、唐使の計略と河西国人の術策の真相が分かり、それに見合う妥当な処置を取ることによって龍を危難から救済することができたのである。こうなってくると龍を危難から救済したことに対する報いというものはおのずとその方向性が決まってくる。つまり、人知れず秘儀をもって行った護国神除去の計略が見破られたからには、唐使もその神威なる明晰さを見せている元聖王に感服せざるを得ず、それがこのエピソードの結末と転ずるのである。

「真聖女大王・居陀知」（『三国遺事』巻二「紀異」）条における龍の救出による報いは、生涯の伴侶を得る、名誉および財物を手にするなど人生の栄達を扱っているものである。このエピソードを構成するモチーフの詳細を辿れば、

その1) 龍の娘を妻にもらう。

- 1) ' 娘を妻にさせようとする老人の申し出に、居陀知が許諾する。
- 2) ' 老人が娘を花に変え、居陀知の懐に入れる。
- 3) ' 帰国後、居陀知が懐から取りだした花が女になり、同居する。

その2) 名誉と財物を手にする。

- 1) ' 老人が二体の龍に命じ、居陀知を抱えて使臣の船に追いつかせ、使臣の船を護衛させる。
- 2) ' 唐人が二体の龍が護衛する新羅船を見て、皇帝に陳述する。
- 3) ' 皇帝が歓待する。
 - 1) "宴を張り群臣たちの上席に座らせる。
 - 2) "金帛を与える。

と二つに分けて見ることができる。龍の娘を妻にもらうというモチーフは、系統からすれば異類交婚談に分類できるであろうが、居陀知が龍を危難から救済してあげたお礼に龍の娘を妻にもらうという展開からすれば動物報恩談、父龍により花にさせられ、陸ではさらに女になった龍の娘のことからすれば変身談にも分類することが可能なものである。

居陀知はさらに龍を危難から救済してあげたお礼に名誉と財物をも手に入れている。そして、

名誉と財物を手に入れる経過を見れば、それは龍が水神として航海の安全を主宰し護船する龍¹⁸という觀念が用いられている。龍の護衛により中国に着く新羅の船のことが皇帝に耳にまで届くことにより、皇帝が宴を張り群臣たちの上席に座らせるような国威が宣揚される。と同時に、金帛が与えられるのである。

4、終わりに

以上、韓国の説話の中において、水の支配者としての龍の姿を考察してみると同時に、その龍が説話の構成上はどのように表出されているかについて論じてきた。水の支配者としての龍は、小にしては井戸、泉、池、大にしては大海にいたるまでの水域を臨機に随意に往来しながら棲息するもので、さらには仏教寺院内、天界、人間界を来往するものでもある。水の支配者としての龍の住処が水域に止まらず、仏教寺院内、天界、人間界を来往するものであるというのは、龍が時空の制限に束縛されない神威力を持ちあわせている存在として、人々の信仰の対象となりえる基本的要素を備えていることがわかる。しかし、そのような神威力を持ちあわせている龍であるとはいえ、説話の構成においての龍は呪文力に弱いという弱点で危難にさらされる存在として表出され、知略に優れた人やあるいは技量を備えた人などの特定の人力を借りて始めて新威力ある姿を保持することができるとされている。説話構成上において龍の姿がこのように表出されるということは、説話を語る人たちにとっての龍の存在が、水の支配者として信仰される神域の存在であることに加え、人々の生活の付近で神人が相互扶助する形で同居を図る精神が読みとれる。

注1、張徳順、『韓国説話文学研究』P107「龍伝説と<龍歌>の龍」、ソウル大学出版部、1978

注2、龍の護国が示される記事としては、「恵通降龍」（『三国遺事』巻五「神呪」）条を取りあげることができる。そこには、「以前、密本法師の後に高僧の明朗がいた。彼は龍宮に入って神印〔梵書には文豆婁となっているが、ここでは神印とっている〕を得てから、神遊林〔今の天王寺〕を建て、しばしば隣国の侵寇を祓った。云々」とある。

注3、龍の護教的性格を記す説話は、『三国遺事』の中にも多数存在する。例えば、「洛山二大聖・観音・正趣・調信」（『三国遺事』巻三「塔像」）条においては、「義湘法師が唐から帰国したばかりの時、齋戒してから七日目に座具を晨水に浮かべると、龍・天八部神衆が侍従し観音真身が住んでいるとされた洛山の洞窟の中に案内してくれた。それで、空中に向かって参礼すると観音真身が水晶の数珠一貫を出してくれ、法師がそれを受けてから退くと、今度は東海の龍もまた如意宝珠一顆を献上した。云々」とあり、「関東風岳鉢淵藪石記」（『三国遺事』巻四「義解」）においては、「真表律師が辺山の不思議房において発憤して修行精進することにより、弥勒仏と地藏菩薩より教法を受け終え、今度は金山寺を建てようと思ひ、山から下りて大淵津についた時、突然龍王が出てきて玉袈裟を献上し、八方の眷属を引きつれて彼を護衛し金山藪に行った。」とある。そのいずれも僧徒に侍従・守護する龍の姿が記されたものである。

注4、海中の世界が人間世界同様一つの物質界として存在するという事、そしてそこには水の支配者たる龍が棲息していると考えられていたことは、「明朗神印」（『三国遺事』巻五「神呪」）条においては、「明朗法師が唐にわたって仏道を学んで本国に帰ってくる途中、海龍の頼みによって龍宮に入り、そこで秘法を伝え、黄金千兩の施しを受け、地の下を潜行して自分の家の井戸の底から湧き出た。云々」とある記事からも、そして、「宝壤梨木」（『三国遺事』巻四「義解」）条において、「祖師

知識が中国において法を伝授してから帰ってくる時、西海の中の龍が宮中に迎え入れて経を唱えさせ、金箔錦の袈裟ひと揃いを施し、併せて一人の龍の子・瑠目を与えてお供をさせて帰らせた。」とある記事からも推し測られるものである。

注5、「明朗神印」（『三国遺事』巻五「神呪」）条には、「明朗法師が唐にわたって仏道を学んで本国に帰ってくる途中、海竜の頼みによって竜宮に入り、秘法を伝えた」とあり、「文虎王法敏」（『三国遺事』巻二「紀異」）条には、「近ごろ明朗法師が龍宮に行つて秘法を学んできた」とあり、更に「惠通降龍」（『三国遺事』巻五「神呪」）条においても、「明朗法師が龍宮に入つて神印を得てから、神遊林〔今の四天王寺〕を建て、しばしば隣国の侵寇を追い払つた」とある。各記事により、明朗法師が龍宮で秘宝を伝えてきたかあるいは手に入れてきたかの別はあるが、いずれにしても、明朗法師が龍宮に入ったという事実は変わりがなく、明朗法師のこのような入宮の事実は、『三国遺事』全巻において三箇条に繰り返し取り上げられている。これは、入宮の事実が明朗法師の修行の盡力を明かす事実として認識され、法師の経歴に箔をつける結果をもたらしていると解釈することができる。

注6、仏教における龍の護教的性格。注3参照。

注7、玄容駿教授は、済州島の巫俗の堂神（村落守護神）神話の分析の結果から、「処容郎・望海寺」条における龍による雲と霧の覆いを、「神が民衆や司祭者から信仰され儀礼を受けるために自らの存在を知らせる方法」と解釈し、その観念を「凶險致祭観念」と呼んでいる。（玄容駿、『民俗学研究』P209「処容説話考」、正音文化社、1990参照）。本論では、「天候の変化による海域の水神なる龍の存在表出」としてのみ解釈しておくものとする。

注8、『法華経』上、P15、岩波文庫、1967

注9、『法華経』中、P219、岩波文庫、1967

注10、『法華経』下、P272、岩波文庫、1967

注11、拙稿「『三国遺事』に表現された新羅人の孝行観」、『名古屋大学中国語学文学論集』第七集、P12、名古屋大学中国語学文学会

注12、玄容駿、『民俗学研究』P209「処容説話考」、正音文化社、1990

注13、本論 P28参照

神秘的な力が特定の言葉に宿り、それを唱えることによりその力を受け取ることができると考えそれに働きかけることは、ただ仏教世界における陀羅尼呪信仰に限らないもので、新羅においても在来習俗の中からそのような観念が存在したことが認められる。たとえば、『三国遺事』には、（3条にとどまるが）巻五に「神呪」で枠を設け、名僧たちの呪文を用いる神通力を扱っているのみならず、前掲の「水路夫人」（『三国遺事』巻二「紀異」）条においても、海辺における昼食の途中、突然龍によって海の中にさらわれた水路夫人を見つけだすために、その地方の者たちを呼びあつめ、歌を作って棒で岸をたたくことにより、龍は水路夫人をささげて海から出てきて差しだしたとしていて、特定の儀礼を行うとともに衆人が集団を成し歌われた歌はこの呪文に相通じるものであると見られる。

注14、斐綱、『伝奇』P96「金剛仙」、上海古籍出版社、1980

注15、李相日、『民俗学研究』P99「変身説話の類型分析と原初の思惟」、正音文化社、1990

「この変身はその契機からして、他者の意思により強制的に変身させられる他意による変身と自ら積極的に変身を図る自己意思による変身に分けられ、グリーム民譚を中心とするヨーロッパ的な変身のほとんどが、彼岸者や超自然者あるいは世俗的執念による呪いの形式で他意による変身中心であることに對し、韓国民譚では、精霊類だけでなく人間やその他の生物においても随時自己意思による変身が見える。それは人間や生物において超自然的能力の収容がより自由である原初の思惟の現われでないか。」

注16、年老いて狐の変身術の話は、「円光西学」（『三国遺事』巻四「義解」）条においても描写される。その条に登場する年老いた狐の言葉を借りると、「神は、[わたしの年は三千年に近く、いま神術がもつとも盛んである。これくらいのこと（）は些細なことで、驚くにたりない。また未来の出来事も知らないことはなく、天下のことも通じないことはない。いま思うのだが、云々]と、年老いた狐の存在が如何なるものかに対して述べている。しかし、ここの老い狐は、円光法師と調和をなして生活しているのみならず、仏法の勧進者としての面貌も帯びている。

注17、『三国史記』P111、「図書出版民族文化」、1986

宣徳王の即位にまつわるこのエピソードは、『三国史記』の「新羅本紀」に「先代の宣徳王が亡くなっても王位継承の子がいなく、群臣が王の親族の子、周元を国王に立てようとした。その時、あいにくも大雨が降って川の水が張り、家が京の北側二十里のところにあった周元はその川が渡れなくなった。そのことに対し、ある者は、「君主が大位に即位するのはそもそも人の謀るところではない。今日の暴雨は天が周元を王にさせたくないがためであるか。云々」と言い、それにより後の聖徳王なる敬信を立てて王位を継がせた。すると雨が止み、国人皆が万歳を呼ばわった」とあり、そして『三国遺事』などにも所収されていることから推し測れるように、元聖王の即位時の既定事実として受けとめられたようである。

注18、本論 P28参照